

# 書 評

ライシャワー教授「十六夜日記」

Edwin O. Reischauer:

*The Izayoi Nikki*

笹 淵 友 一

本書は Harvard-Yenching Institute から發行されてゐる Harvard Journal of Asiatic Studies の第十卷三—四號（一九四七年）に載せられた阿佛尼作「十六夜日記」の英譯並に研究論文の抜刷である。しかし抜刷とはいふものの五十頁に及ぶ研究論文と約二十頁の詳細な索引とを含めて、四六倍版大百三十頁餘に及ぶ大冊は單行本としても十分な分量を備へてゐる。ライシャワー教授はハーヴァート大學に東洋學を講ずる新進教授であり、本書はその東洋研究の一部をなすものであるらしい。（因にいふ、紐育にある東京女子大學協力委員會の實行委員長ライシャワー博士は教授の父君である）

齋藤學長から本書を示され且その紹介を慫慂されたときその研究論文を一見して、豊富なる資料を自由に驅使し、わが國の諸學者の研究を縦横に引照して論旨を展開されてゐる、所謂博引旁證到らざるなきその論述の慥さに驚かされた。それはアメリカの東洋研究、日本研究について何の

知識も持たない筆者の興味をそそるに十分であつた。その讀後感の若干を書きつけて紹介に代へようと思ふ。

筆者が興味をひかれたのは十六夜日記の譯文そのものよりもむしろその緒論、研究論文である。緒論は二部に分れてゐる。第一部は「十六夜日記とその日本文學に於ける位置」について、第二部は「阿佛尼とその家族」について述べられてゐる。この緒論は恐らく「十六夜日記」について豫備知識を持たないアメリカの讀者を念頭において書かれたもので、従つて多分に啓蒙的解説的な意圖を含んでゐるが、同時に學術論文としての高さを十分備へ、鎌倉文學の研究書としてわが國の學者に與へる示唆も少くないと思ふ。

教授はまづ十六夜日記、必ずしも代表的な日本古典といふわけでもないこの作品をどうして研究對象にえらんだかといふ疑問に對して説明を加へてゐる。「十六夜日記」が日本古典を代表する偉大な作品でないことは教授も認めてゐる。それにも關らずこの日記には研究の興味を刺戟する幾つかの理由がある。その一つはそれが日本の讀者の間に大衆化、普遍化してゐるといふこと、第二は鎌倉時代文學の諸傾向—古代散文學のスタイルの衰頹、和歌の模倣性、形式化の増大といふやうな—を極めてよく現してゐる作品であること、第三は十六夜日記の和歌が中世人の心情心理のみならず和歌そのものの性格についても示唆を與へるものをもつてゐること、第四はこの日記の作者阿佛尼が當時

としてはすぐれた個性の持主であり、又十九世紀後期に女流文學者が現れる迄、古典時代以來輩出した女流文學者の最後の人物であること、第五は十六夜日記が日本の封建制の一面を明らかにするに足る歴史的事件を中心として書かれてゐるといふこと等である。これらの諸點はこれまでの研究者も氣がついてゐることである。ただ、第四の點などは筆者は教授の文章に接してなるほどさういふ觀方も出来るかと思つた位で特にそれを意識してもゐなかつたことであるが一つ一つについていへば特に創見があるといふわけでもないが、しかしどこかにわが國の研究室にないセンスが働いてゐるやうに感じられる。たとへば十六夜の大衆性といふ點に興味を感じてゐるのなどもそれで、十六夜の文藝性と關聯してこれを掘下げて行けば日本文學の全般に互る問題にも觸れてきさうである。封建性の問題を取上げるにしてもどこかにわれわれと異なる角度とかセンスとかいふものが感じられるのである。

わが國の學者の業績が本研究の基礎となつてをり、これらの業績を實によく消化してゐるところに本研究の魅力の一半はある。しかし他の一半の魅力はライシヤワー教授獨自の立場がそれに加はつてゐること、といふよりもむしろこの立場に基いてわが學者の業績が批判整理されてゐるところにある。教授の立場といふのは歴史と環境とを異にするアメリカの學者の捉はれない理解の方法であるが、その

中心にある學的立場といふのは對象を文學史的又は歴史的に取扱はうとする歴史家のそれであつて、教授の論述には到るところにこの歴史家としての眼が光つてゐる。この緒論も第一部は文學史に、第二部は歴史にそれぞれ重點をおいて整然とした論旨を展開してゐる。その論述は水際だつた鮮さである。

第一部が目ざしてゐることは日本文學史の展望の前に「十六夜日記」の文藝性を把握しようとするものである。教授によれば西洋人によつて書かれた日本文學史はアストン Aston の日本文學史（一八九八年）が唯一の本格的な文學史であるといふ。而もこの文學史は文學史的把握の方法に於ても、精密な知識を與へるといふ點でも不満足なものである。それが本書第一部に於て十一世紀から十四世紀に互る日本文學史の敘述を必要とした原因である。この敘述の輪廓は文學の環境として、時代の政治的、社會的、思想的傾向を概觀し、つづいて和歌連歌物語語歴史物語軍記物語日記紀行隨筆等の各ジャンルについて略述し、最後に「十六夜日記」に及んでゐる。この文學史の敘述は簡潔で而も概して頗る要をえたものである。

「十六夜日記」の文藝性について教授が主として参考にされたのは次田潤・藤村作・市村平・佐野保太郎・風巻景次郎氏等の著書や論文であるが、特に風巻氏の「阿佛尼の文學（國語と國文學 昭和四年六月號）が最も多く参考にさ

れ、教授の理解を支へるものとなつてゐるらしい。

教授は「十六夜日記」の文藝的價值を主としてその和歌におき、この日記が鎌倉時代の和歌の傾向について解説的役割を果してゐるといふ點にその主なる價值（の一つ）を置いてゐる。阿佛尼の和歌觀においては傳統の強調、世襲的權力への信賴が天才に取つて代り、限られた題目によつて歌を詠み、古歌を模倣し或はこれと關聯して歌を作るといふ模倣性因習性がインスピレーションに取つて代らうとしてゐる。彼女の譬喩、套語、掛詞等の言語のトリックに對する信賴は形式主義が眞の情緒と如何におき換へられてゐるかを示すのである。

更に「十六夜日記」の和歌は以下の點に於ても和歌の理解を助けるものになつてゐる。和歌には極めて省略が多く且暗示的である。大多數の歌に於てはこれを理解しようとする場合、その歌の要素の一つによつて示唆されたある場面を讀者自身描き出し、あるシンボルによつて暗示された氣分を自ら感得する能力が讀者に必要なのである。又和歌の興味はその内容に對する興味と同程度にその内容を表現する方法、たとへば適當な隱喩、巧妙な形容、或は奇警な聯想等にかかつてゐる。普通以上に表現上のこの形式化が認められる阿佛尼の歌に於ては洒落ともいふべき言語の遊戲にたよることが一層大きい。従つてこのやうな言語のトリックの理解が一般的に和歌の理解を助けるのである。

「十六夜日記」が和歌の理解にとつて有益であるといふ更に他の理由は散文の部分が和歌の場面や情緒の理解にとつて必要な序詞の役割を果してゐるといふこと、又阿佛尼の言語のトリックが比較的理解し易いために彼女の和歌の描き出す情景も明瞭に浮び出るといふことである。

ライシヤワー教授が言語の遊戲とかトリックとか呼んでゐるのは主として枕詞、縁語、掛詞の三種をさしてをり、教授はこれらの修辭法についての解説を加へると共にその譯法について説明してゐる。即ち枕詞と縁語については脚註に於て説明を加へ、掛詞はその掛けられた二つの意味を二行に譯し上の行はその語に先立つ語句を受け、下行の譯は以下に來る語句と關聯をもつやう工夫してある。又短歌體（十六夜日記には一首の長歌をも含んでゐる。）の譯ではこれを二行詩の形に譯してあるが、これは短歌が五七五の長句と七七の短句とに分れることが多いといふ考へ方によつたのである。そして各行内の語句の順序は英語の語序によつてゐるが、一行と二行との順序は和歌の上句、下句の順序に従ひ出來る丈和歌の味ひに近づけることに努め、又長歌は完全に原作の句の順序を追つてゐる。（しかし、すべての歌が三句切になつてゐるわけではないから實際の譯の場合には必ずしも三句切といふ形式に捉はれてはゐない。）更に短歌長歌共に原作をローマ字で併せ記し、詳細な註を施すなど細心の注意が拂はれてゐるのである。

第二部は阿佛尼の生涯とその家族に關する考證から「十六夜日記」の契機となつた訴訟事件の考察、阿佛尼歿後の歌壇の趨勢等に及んでゐる。その敘述は阿佛尼の生立から夫藤原爲家との關係、爲家との間に生んだ爲相爲守の二子及びその他にあつた三人の子供（この父親は誰だか判らない）のこと、繼子爲氏との感情的葛藤その他その家族的傳記的事實は細大洩らさず、而も整然として一糸亂れぬ筆致を以て敘述されてゐる。勿論それらの事實はわが國の學者市村氏や玉井幸助氏松井驥氏奚疑庵氏その他の研究に負うてゐるが、複雑な家族關係を鮮に説きつくしたのみならず、人間阿佛尼の肖像を血肉を具へた人間像―彼女は藝術と權勢とを熱愛する意志的な女性であると共に實子への偏愛に世の憚りをも忘れる愚かな母親でもあつた。―として描き上げてゐるのは單なる考證的研究のなしえないことである。さういふ意味で本書は阿佛尼の人間に深く迫つてゐる。敘述は阿佛尼歿後の歌壇の趨勢にも及んでゐるが、しかし教授が最も興味を感じてゐるのは恐らく細川莊の訴訟事件であらう。この訴訟事件は公家法と武家法とが並行してゐたわが鎌倉時代の複雑な法律制度と密接な關係があり而も公家法が武家法の前にその權威を失ひつつあることを暗示してゐるのがこの訴訟事件なのである。教授の歴史家としての眼はこの封建時代相の一斷面を的確に捉へて鮮にこれを解明してゐるのである。

以上は本書緒論の輪廓である。本書がその學的水準に於てわが國の専門學者のそれに匹敵するものであることはいふ迄もあるまい。しかし如何に優れた研究でも多少の疑問や希望を挟む餘地があることを免れず、本書と雖もこの例外ではありえない。その一二の點について卑見を述べることは讀者としての義務でもあらうと思ふ。

その一は本書二五九頁に和漢混淆文の起源に關して「京都宮廷の政治的、經濟的衰微の間接的結果として宮廷貴族の漢文の知識が低下し、日本人にとつて正確な漢文を書くことが次第に困難になつたために彼等は時に和漢混淆のスタイルに頼るやうになつた。」と述べられてゐることである。この見解が如何なる根據に基いてゐるか知りえないがこれは恐らく誤解であらう。即ち和漢混淆文なるものは漢文が退化して生じたものではなくて純粹な國文體が漢文脈に影響され侵蝕された結果生れたものであつて、從つて宮廷の衰微とは關りのない現象であると考へられる。

第二に物語展開の敘述に當つて源氏物語から説起して狹衣物語、濱松中納言物語、住吉物語に及び、濱松中納言、住吉をそれぞれ宇津保、落窪二物語の流を汲むものと述べながらこの二物語については殆ど何の説明も加へられてゐないのは（二六二頁）、他の部分の整然たる敘述に較べてやや手落の感を免れない。しかし以上の如きは微瑕に過ぎず、それを以て本書の價值は豪も減殺されないであらう。

思ふにアメリカの學的水準の高さを示すのは原子力研究に代表される自然科学部門のみではない。本書がわが國の學者を刺戟することは少くないと思ふ。筆者は教授がこのやうなすぐれた研究を今後も發表してわが古典を廣く世界に紹介されると共にわれわれにも亦多くの示唆を與へられるやう希望してやまない。最後に本書譯文の一二の部分を抜抄して原文と對照させよう。(尙譯文は詳細な脚註を加へて理解を容易にするやう配慮されてゐる。)

1. Children of the modern age do not even dream that the name of the book which, it seems, was discovered of old in a wall has anything to do with them. Most definite is that which he left us written down time after time—like the arrowroot leaves of the hill of Mizuguki. But of no avail are a parent's admonitions. I realize that humble I alone am overlooked in the benevolent administration of a wise ruler and denied the sympathies of his loyal ministers; and yet things should not continue thus. But there being nought that I can do about my troubles I am sad. (p. 304)

むかし、壁のなかよりもとめ出でたりけむ書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身の上の事とは知らざりけりな。みづぐきの岡の葛葉、かへすぐも、書きおく跡たし

かなれども、かひなきものは親のいさめなり。また賢王の人をすて給はぬ政にもれ、忠臣の世をおもふ情にもすてらるゝものは、數ならぬ身ひとつなりけり、と思ひ知りながら、またさてもあらで、猶この愁こそ、やるかたなく悲しけれ。

2. Though it be a journey on which I know  
not my uncertain span of life,

I go on, trusting in <sup>Osaka</sup> the hill of meeting again.  
(p. 311)

さだめなき命は知らぬたびなれどまたあふ坂とたのめて  
ぞ行く